

## 日本放射線安全管理学会第11回学術大会 印象記

横田 繁昭  
Yokota Shigeaki

日本放射線安全管理学会第11回学術大会が、平成24年12月4日(火)～6日(木)の3日間の日程で大阪大学吹田キャンパスで開催された。当会場で第1回学術大会が開催されてからちょうど10年目の記念大会である。

開会にあたり、大会長の飯田敏行氏(大阪大学大学院工学研究科教授)より挨拶があった。

特別講演は3日間に分けてプログラムされていた。1日目の特別講演1では、文部科学省科学技術・学術政策局放射線対策課長(放射線対策課：平成24年9月19日～平成25年3月末)の小川壮氏より、「放射性同位元素等の規制に係る最近の動向」と題して講演があった。例年は改正法令の説明から始まるが、平成24年4月に施行された今回の改正は既に周知とされ、復習の意味で簡単に説明があり、我々が目下関心のある原子力規制委員会の発足と放射線障害防止法に基づく規制関連業務の移管について重点的に説明がなされた。

既に同委員会の発足時に放射線審議会が移管されている。さらに、平成25年4月から放射線障害防止法に基づく規制も移管されるため、同法に基づく許認可手続き等も平成25年度以降は原子力規制委員会(及びその事務局の原子力規制庁)がすべて担当するとのこと。また、現在は文部科学省が行っているモニタリングの動向について、東京電力福島第一原子力発電所事故以来、身近な放射線に対する国民の関心が非常に高まっていることから今以上に環境モニタリングを実施し、速やかな結果の公表に努め

るとのことであった。

シンポジウムでは、3題の演題が生まれ、1.「メディアのリスク情報はどこまで信じられるか—“メディアのメディア”を提案したい—」と題して、毎日新聞社生活報道部の小島正美氏、2.「放射性物質汚染に対する福島県民の理解と意識」と題して、福島民報社の鞍田炎氏、3.「科学者の立場から見たリスクコミュニケーションの在り方」と題して、京都大学の渡邊正己氏ら各演者から問題提起がなされた。今回のシンポジウムは最近非常に重要になっている“リスクコミュニケーション”についてであった。その中で特に印象に残ったのは、「メディアのリスク情報はどこまで信じられるか」と題して話題提供されたことである。かのNHKでさえドキュメント番組の中で、事実の隠蔽、音声記録の改ざんなどがあり、視聴者が正しい情報を知る権利が侵害されたこともあるので、“メディアのメディア”でチェックする必要性が大きくなっている、こういった情報が氾濫すると負のスパイラルに陥る危険性があるが、“メディアのメディア”は誤りの再発防止に繋がると、主張されていた。会場からも活発な質疑応答がなされていた。

2日目には、招待講演が一般公開された。招待講演1ではMargit Osvay女史(ハンガリー科学アカデミー)による「成層圏の放射線モニタリング」、招待講演2ではJanwillem van Dijk氏(EURADOS委員)による「ヨーロッパにおける放射線防護—EURADOSの活動」の2題

において、宇宙線を含めた放射線モニタリングに関して新しい視点を紹介され、また宇宙線による航空機搭乗員の被ばく線量などについて説明があった。

続いて行われた特別講演2では、大阪大学名誉教授の住田健二氏より「将来の原子力安全について」と題して講演があった。住田氏は日本の原子力の発展に寄与された方であるため、思い入れが強く感じられた。日本には低線量被ばく研究を行う国家的な組織がないことに触れられ、日本に寄せられた世界中からの同情や義援金に応えるためにも、できるだけ正確な被ばく線量の推定を伴う各種の健康調査等の記録や統計を公開することにより、人類全体への恩返しとなり得る長期的な政策が必要であるとのことであった。

3日目には、平成23年の原発事故由来の放射性物質に関する調査・対策委員会報告と題して、委員会活動の概要の紹介後、5つの小委員会から現状報告が行われ、会場でも活発に意見が交わされた。今回は現状報告が主であったが、会場から指摘された問題点を含めて今後どのような展開を示すか、また、我々もどのように協力できるか考えさせられた。

午後からの特別講演3では、京都大学名誉教授の丹羽太貫氏より「福島原発事故と放射線防護について」と題して、低線量率放射線や内部被ばくの健康リスクの実態、健康リスクの年齢依存性などのサイエンスが放射線防護にあたり重要な役割を果たすこと、また防護に関わる者として、現存被ばく状況における社会的バリューがどのような意味を持つか論じられた。

今回のシンポジウムと特別講演に共通しているのは、放射線についての科学的知見と社会的な価値に基づく判断が、必要な指針となることであった。

セッションは2つの会場で3日間、シンポジウムや特別講演等の合間に行われ、40題の口頭発表があり、放射性セシウムの動態及び除染技術のセッションが新たに設けられた。また、2日目の午後にポスター39題の発表が行われた。いずれの会場でも活発な議論が交わされ

た。そして今大会最後の講演は、“平成23年度学術業績賞受賞講演”で、当学会の学会誌に掲載された中から選ばれた、研究奨励賞1題、技術賞2題が紹介された。研究奨励賞は「放射線教育教材としての発光バクテリアの利用」について花房直志氏（岡山大学）より、発光バクテリアの突然変異を発光の有無等を通して視覚的に捉えることで、放射線障害の標的がDNAであることを通して放射線が人体に与える影響を理解する一助となる実習教材の構築が可能であることを講演された。やはり視覚的に捉えることは理解の近道であると思われるので、より簡便で視覚効果の高い教育教材の研究をこれからも是非継続してほしいと感じた。技術賞では、井原陽平氏（大阪大学）より「FPGAと電子技術を活用した大気 $\alpha$ 放射能測定のための開放型電離箱システム」について、電離箱は湿度等の影響を受けやすい欠点があるが、この研究ではFPGA（Field programmable gate array）という電子回路技術を取り入れることで、大気中の $\alpha$ 放射能濃度の測定が十分行えるとの説明があった。同じく、藤淵俊王氏（茨城県立医療大学）による「イメージングプレートを用いたクルックス管からの漏洩線量分布測定」では、中学校や高等学校などの教育現場で目にするクルックス管の線量の等高線分布をイメージングプレートを利用して測定し、IP画像として視覚的に捉えることでX線の広がり等を確認することができ、生徒や指導教員の被ばく低減にも繋がると説明があった。若い世代の学会会員がこういった研究開発を是非継続してほしいと感じた。最後に、本大会恒例の優秀発表者の大会賞表彰をもって、3日間にわたる学術大会が終了した。

大会受賞者の方々は以下の通りです。[優秀プレゼンテーション賞] 豊田晃弘（高エネ研）、吉田有輝（阪大院工）、[優秀ポスター賞] 宮倉悟（東医歯大医歯学研究支援セ）、長野裕介（徳島大院HBS保健）、樺島啓介（阪大院工）、以上敬称略、おめでとうございます。

（東海大学 湘南放射線管理センター）